

教団新報

定 価 1 部 140 円 (本 体 133 円 千 共 200 円)
予 約 購 読 料 1 年 分 千 共 5,000 円
紙 代 の み 3,500 円
振 替 00140-9-145275
本紙を購読ご希望の方は、前金を
そえて、お近くのキリスト教書店
へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18
日本キリスト教会館内 電話 03(3202)0546
FAX 03(3207)3918
E-mail: shimpoh-c@uccj.org
発行人 竹 前 昇
編集主筆 竹 澤 知 代 志
印刷所 株式会社きかんし



十日町教会

メッセージ

マタイによる福音書二〇章二九、三四節

開かれた瞳で何を見るのか



新井 純

主イエスと弟子たちは、エルサレムに向かう途中、エリコの町を通った。町を出ようとした時、道端に二人の目の不自由な人が座っているところを通りかかった。

二人は、そこを通り過ぎていたのがナザレのイエスと、その一行だと知り、声を張り上げ懇願した。「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください!」

「あわれむという言葉には、一般によく知られている同情するということとは別に、生きるか死ぬかの権利を握られているような罪人を、罰しないで許そうという慈悲、情け、容赦、そういった意味もある。障碍や重い病気などが罪の報いであると思われられていた時代のこと、もしかしたら、この二人は単に障碍を持つ者への慈悲を求めただけではなく、救い主と噂されていたナザレのイエスに、罪の赦しを願ったのだろうか。

二人はますます激しく叫ぶ、「憐れんでください!」と。その声は主イエスに届いた。そして主イエスはたずねる、「何をしてほしいのか?」二人は答えた。「主よ、目を開けていただきたいのです」

チムグリサ

沖繩の言葉に、チムグリサというのがあると聞いた。月後の昨年二月、関東地区の紹介でマリンバ奏者チム・エリョンさんを招いて震災復興支援コンサートを教会で行った。疲れやストレスがたまって休まる間もない生活の中で、少しでもホッとできる時を地域の方々に提供したかった。コンサートの中でチヤンさんが「震災の翌日、夕食

の時にテレビをつけたら震災のニュースが流れた。すさまじい被災地の映像を見ていたら、悲しくなってきた。涙が出て、食事がなくなって涙が止まらなくなった」と語り、大粒の涙をこぼした。その演奏が、このような思いと共にここへやってきたことを知った被災地の人々の目からも、涙が止まらなくなってきた。

教会での震災復興コンサートは、チヤンさんの他に、沢知恵さん、JCフラウザースト、これまでに三回行われた。コンサートのタイトルはいずれも「元気をもう一度」とした。これは、北海道の養護学校の生徒たちが贈ってくれた言葉。

教会ホランティアセンタで活動した養護学校の先生が、帰宅後生徒たちに被災地での働きを通して見聞きしたことを生徒たちに話して聞かせた時、生徒たちから「何かをしよう」と声があがり、被災地に言葉を贈ることになった。その言葉を贈る時、病氣や障碍で苦しんでいる上に、周囲から「がんばれ!」という一見励ましと思われる言葉によってさらなる苦しみを負わされている生徒たちは、

閉ざされていた心に

主イエスが抱かれた憐れみには、一緒に苦しむというニュアンスがある。目が不自由なだけでも辛いだろうに、その上罪人とされて虐げられてきた二人への、まさに自分の体を切り刻むほどの痛切な思いやりがそこにはある。単なる同情心ではない。共に苦しみを分かち合い、自らの事として受け止め、そしてその苦しみを解放して下さるという愛の行為へ主イエスは私たちを導いていく。

主イエスは二人の目に触れてくださった。すると、二人の目はたちまち見えるようになった。奇跡的な癒しの出来事だ。でもそれだけではない。罪人として誰もが忌み嫌

い、差別していたこの二人に対して主イエスだけではとうていではなく、他の人と同じように接して下さり、この二人の訴えに耳を傾け、そして憐れんでくださったのだ。

それは、肉体的な意味でのいやしのみならず、彼らの閉ざされていた心に、光を与えようとする出来事でもあった。罪人にも理解と憐れみをくださる方がおられる、このことがこの二人を真に苦しみから解放した出来事であつたらう。まさに、主イエスは罪からの解放者であつた。

この真の解放者の姿に、周囲の人々は何を見ただろう。二人の叫びが私たちに向かってくる、「私たちは、誰の目を開けて欲しいと叫ぶのか」

一つの体

だから、主イエスの姿を見て、小さくされた者は罪人だという先入観から解放され、今から自分も同じようにしようと思ふ者が現れて出てきたに違いない。そのことがまた、二人のいやしではなかったか。

教団、そして関東教区の震災復興支援は、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に喜ぶのです」という聖句に基づく祈りから進められている。被災地にとって、この祈りこそが大きな慰めであり励ましとなっている。なぜなら、私たち



毎日曜日毎に、それぞれ

出来事を通して私たちに教えてくださったこと。主は私たちと共におられる。私たちが強い時も、弱い時も、光を見いだす力強い響きがあつた。

▼先日、壮年の修養会をもち『主の祈り』を学んだ。毎日曜日毎に、それぞれ

ない私たちに向かって、小さくされた者たちが叫んでいる、「みんなの目を開いて!」と。

「救い出されたまへ」と「救い出されたまへ」とルビがふつとある。何十年も「救い出されたまへ」だと思ひ込んでいた人は少なくないらしい。▼讃美歌も信仰告白もそうだが、慣れ親しんだもの程速く唱える。殆ど何も考えずに。礼拝が終わったら、今日の式次第に使徒信条があつたかなかつたか記憶が定かでないから、直ぐ息が上がる。年配の方々がゆっくり祈る理由が初めて解った。主の祈りをもっとゆっくり唱和しましように申し合わせた。勿論、聖書の朗読も、信仰告白も。▼信仰生活くらいは、少しゆっくりでも良いだろう。いつかは、必ず、天国に行き着くのだから。

あなたはどうか考えるのか

第八回部落解放青年ゼミナール

「何故部落差別が今だに残っているんだろう。差別はなぜおこるのか？」このような基本的な疑問をもつて多くの人が今年も第八回

部落解放青年ゼミナールに集った。八月九・一二日、京都から大阪のいずみ教会に会場を移し行われたゼミ

は二年目。部分参加等も含めて総勢五九名の方々が関わってくださった。

参加者の半数は一〇代・二〇代という知識も経験も若い私たちであったが、だからこそ語り合える現実というものがあつたと感じ

た。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い



青年ゼミナール参加者、いずみ教会にて

「日本キリスト教海外医療協力会・JOCsは、『お金や物を安易に送るのではな、人を派遣することを通して共に生きる』ことをモットーに活動しているNGOです」小冊子に記されている通りに、計七年以上パングラデシュで活動し、様々な障害を持つ人々と「共に生きて」きた岩本直美さんの報告会が、去る七

弱さの中にこそイエス様が

日本キリスト教海外医療協力会

「日本キリスト教海外医療協力会・JOCsは、『お金や物を安易に送るのではな、人を派遣することを通して共に生きる』ことをモットーに活動しているNGOです」小冊子に記されている通りに、計七年以上パングラデシュで活動し、様々な障害を持つ人々と「共に生きて」きた岩本直美さんの報告会が、去る七

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

は、「いばらの冠」に示された。青年ゼミ自体はクリスマスに拘った集りではないが、その多くが教会での働きを担う者たちである。地元の青年たちとの出会い

東 京 今年度の東京教区 区の取り組み

木下宣世

二〇〇五年度、東京教区が特に力を入れて取組もうとしていることがある。それは教区内の教会・伝道所に対する助成制度の整備に関することである。

これまで東京教区には「教会強化のための支援要綱」というものがあつた。これは比較的短期間に自立する可能性のある教会を対象としたもので、例えばこの支援により教師がアルバイト等から解放

教区 コラム

しかし、この要綱が実施されたのは一九六九年であり、その後起こった長期に亘る紛争のため実際にはこの要綱は有効に機能することはなかつた。

また、今日としてみると時代の変化により、実情に合わない面も出てきている。そこで、この要綱を見直し、今

（東京教区総会副議長）

れた。自らが担当することによって改めて学びの機会が得られたとの声も聞かれた。その一つ、ワークショップは、参加者の印象に残った。情報化社会といわれる昨今であるが、私たちに知られていない現実が沢山ある。沖縄・辺野古の基地問題、日本における歴史的に若い年齢層に依頼し

た。自らが担当することによって改めて学びの機会が得られたとの声も聞かれた。その一つ、ワークショップは、参加者の印象に残った。情報化社会といわれる昨今であるが、私たちに知られていない現実が沢山ある。沖縄・辺野古の基地問題、日本における歴史的に若い年齢層に依頼し

た。自らが担当することによって改めて学びの機会が得られたとの声も聞かれた。その一つ、ワークショップは、参加者の印象に残った。情報化社会といわれる昨今であるが、私たちに知られていない現実が沢山ある。沖縄・辺野古の基地問題、日本における歴史的に若い年齢層に依頼し

た。自らが担当することによって改めて学びの機会が得られたとの声も聞かれた。その一つ、ワークショップは、参加者の印象に残った。情報化社会といわれる昨今であるが、私たちに知られていない現実が沢山ある。沖縄・辺野古の基地問題、日本における歴史的に若い年齢層に依頼し

た。自らが担当することによって改めて学びの機会が得られたとの声も聞かれた。その一つ、ワークショップは、参加者の印象に残った。情報化社会といわれる昨今であるが、私たちに知られていない現実が沢山ある。沖縄・辺野古の基地問題、日本における歴史的に若い年齢層に依頼し

た。自らが担当することによって改めて学びの機会が得られたとの声も聞かれた。その一つ、ワークショップは、参加者の印象に残った。情報化社会といわれる昨今であるが、私たちに知られていない現実が沢山ある。沖縄・辺野古の基地問題、日本における歴史的に若い年齢層に依頼し



プロジェクターを用いての報告会

ある少年は、父親に腰の骨を折られて下半身不随となったが、家族は病院に入れようとしな。彼を助けることでもっと生活が困難になるからだ。JOCsの支えにより、少年は専門の病院で一〇ヶ月の治療を受け、スラムに戻った。車いすの生活だ。どうしてこんなにひどくなったのかという周囲の間に、この子は決して答えない。聞かえないふりをする。父に放り投げられたことは言わない。赦さないと思えない出来

事があった。しかし少年は父も家族をも赦している。このような出来事でもなお消えることのない家族への愛が存在するのだ。「貧しいパングラデシュの人々のただ中に、私たちが人らしく生きる道筋がある。私たち一人ひとりの場合にも自分の弱さの中にこそ、イエス様が現存している下さる、ありのままに自分を差し出して行けば良いと思う」こう結んで、岩本さんの講演は閉じられた。深い余韻が残った。

事務局報

教師異動

関西学院高等部 就教 高山聖子
大森めぐみ 辞任 大前幸正
鳥取 就主 大前幸正
水沢 就代 小林 功
なか 就担 門山路都
紅葉坂 就(担)菊地恵美香
横浜指路就(担)矢澤美佐子
鎌倉雪ノ下 就(担)星野江理香
アレセイア湘南中・高校 就教 秋山 泉
横須賀学院中・高校 就教 小田部実生子
平和学園辞(教)伊藤多香子
横須賀学院中・高校 就(教)伊藤多香子
沖繩キリスト教短大 辞教 村椿嘉信
石川 辞主 笹淵昭平
青堀 辞主 村椿嘉信
〃 辞主 工藤律子
低部 就(代)柴田福嗣人
就(代)大島一利

桐生東部 就(担)金子 健
吉川 就(担)村主政彦
目白 就(担)朴貞蓮
弓町本郷 就(担)北村裕樹
松江古志原 就主 葉以潔
聖学院 就(教)大木英夫
聖学院女子聖学院中・高校 就教 小倉義明
膳所 辞(担)酒井哲雄
沢川 辞(主)奥村真敏
〃 就(代)村田 元
大和郡山 辞(主)原田佳卓
〃 辞(担)尾島信之
〃 就(主)尾島信之
〃 辞(兼)担 東のぞみ
西札幌 辞(代)日向恭司
〃 就(兼)東のぞみ
東札幌 辞(主)藤原 仰
〃 就(代)後宮敬爾
仙台五橋 辞(主)三井啓示
〃 就(担)三井啓示
〃 就(主)村島義也
中目黒 就(代)早川宗八郎
教師隠退 橋詰健介
佐藤孝義
原田佳卓
教師選任 白石和子(二〇〇五・七
・十一常議員会承認)
教師休職 西上信義
教会加入 松江古志原(西中国)
(二〇〇五・七
・十一常議員会承認)
教会・伝道所合併 府中・神辺
(神辺教会々々々々)
広島県深安郡神辺町 大字川南三三二二
(主)宇佐美節子
(担)宇佐美睦朗
教会種別変更 高知中村 第一種から
第二種へ

牧師のパートナー

することもあって会の名称が「牧師パートナーの会」に改定された。「牧師パートナーの会」に参加しない方もおられるが、わたし自身は分区内にある教会それぞれの牧師パートナーと共に歩んでいると感じられる交わりとなっている。現在、教会内では「広報担当」「会計補佐」を、教区では「財務委員（書記・会計）」をしている。「広報担当」の仕事は、特伝・クリスマスのチラシ・ポスターづくりやポスター貼り、新聞社・有線テレビ局回りなどである。身近な存在としての教会と教会の活動を町の多くの人に知ってもらうために店に飛び込み、話し込み、自分

新しい人として

的場 武彦
(下田教会員)

自身が広告塔のつもりで歩き回っている。報道関係の方達からは、他の地域でも行われているように「教会さんはお寺さんと同じ扱いをします」と言ってもらえるようになった。

牧師から「広報担当係り」を置ける教会は少ないと言われたが、交流のある教会からは「下田教会の広報さん」と呼ばれたりしている。パートナーが按手を受けたところ教友か



下田教会礼拝堂にて

ら、勧められ加入した「ワイズメンスクラブ」(信徒運動から始まり、YMCAをサポートし、青少年育成・地域奉仕の団体)が下田にもあり、引越と同時に横浜から移籍した。下田のクラブメンバーを通して短期間に地域事情を知り交友関係が増えた。クラブの活動範囲が教区と重なることもあり、分区分の信徒同士の交流の輪も広がり、伝道について、教会生活のあり方について、よい刺激を受けている。

パートナーが牧師になると判っていたら結婚したろうか?と問われると唖るところだが、パートナーが牧師になったからこそ、教会員・牧師のパートナー・ワイズメンの三つの活動が重なり合う豊かな生活になっているし、一人の人間として私に主が与えてくださった使命、宣教活動の役割が見えてきたのだと思う。パートナーが牧師になる以前の自分とは全く違う「新しい人としての人生」が展開されており、迷い出ることの多かった弟子を用いてくださる主の恵みを実感している。

教育現場への「国旗、国歌」強制の中止を求める要請
内閣総理大臣小泉純一郎様
文部科学大臣 中山成彬様
一九九九年「国旗、国歌法」の成立以来、それまでもまして全国各地で、学校儀式などにおける「国旗、国歌」の強制が強まっています。

とりわけ東京都では二〇〇四年春の卒業式、入学式での処分が二〇〇名を超え、二〇〇五年も処分者が六三名に及んでいます。このような力による「国旗、国歌」の強制は、法制定時の国会答弁に反するのみならず学校現場に無用の混乱をもたらし、多くの教職員が強いストレスによって心を病み、休職者や早期退職者が増加するという事態を引き起こしています。

天皇への賛歌でもある「君が代」の伴奏を信仰上、あるいは音楽的な理由から拒否した音楽の教師たちが処分に近い司法の場に問題が提起されています。また、公立学校のみならず私学に対しても地方自治体当局から「国旗の掲揚、国歌の斉唱」についての通達という形で、圧力が強まっています。

こうした圧力に対して東京や神奈川では「思想、良心の自由」を確保するため「起立、唱和する義務」の不存在確認の提訴を始めています。こうした現場の混乱の原因が「国旗、国歌を指導しなければならぬ」とした「学習指導要領」にあることは明らかであり、このように教育の内容に関わって国家が教育に介入することはもはや「政治的介入」であることは明らかです。

ひととき

真崎みよ子さん

地域の幼子のために



1940 年、東京生まれ。浦和母の会幼稚園々長、明治学院教会々員

浦和母の会幼稚園は、浦和駅から徒歩で一〇分ほどの住宅街に溶け込むように建っている。園舎は、まったく幼稚園の建物らしくなく、大きな住宅と言った感じである。

この園舎には、真崎さんの幼稚園についての考え方が具体的に表現されている。一つは、幼稚園教育は小学校の単なる準備教育ではなく、学校を幼児のために縮小したものでないという。家庭が幼児の人間形成に重要なように、幼稚園も家庭生活、家庭教育の延長でありたいし、家庭と協力し幼児の成長に尽くしたいと願う。もう一つは、この幼稚園の始まりが個人ではなく、地域住民が自分たちの子供への教育を願ったことにある。終戦直後のことである。

一つ屋根の下にいろいろな心地よさ、地域から浮き上がることのない佇まいは、こんな願い、始まりの表れである。真崎さんは、大学進学の際にはっきりとキリスト教保育を志した。医療関係の道も考えたがその道は開かれなかった。ただ、いずれにしても人の役に立つ仕事に就きたいと早くから思っていた。一時、保育の仕事から退いたこともあったが、それ以外は、これまで一貫してキリスト教保育に関係してきた。

キリスト教との出会いは、幼いときにあった。幼くして父を亡くしたため母方の祖父母に育てられた。その中で近所の人に誘われて教会に。中学一年生のときに受洗。初めて礼拝に出席してから高校卒業まで教えるほどしか礼拝を休まなかった。近所の子を礼拝に誘うのが好きだった。教会の中で良きキリスト者たちに囲まれて過ごしたことが人の役に立つ仕事に就きたいとの思いの土壌となった。地域の思いによって建てられた幼稚園。創立六〇周年を迎える。延長保育の実施、未就学児の受入れ等を通して地域に仕えてゆきたいと願っている。

お知らせ

★JOCsチャリティ映画
会/時 10月8日(土) 14時半と18時の2回/上映作品「ザ・カップ」夢のアンテナ/所 千代田区公会堂/入場料 1千円/申込み・問合せ JOCs事務局 ☎ 〇三三二〇八一四一六

戦後六〇年という節目にあつてさまざまな声明、謝罪、あるいは決意表明がなされている。それら一つ一つの重みを受止めていかねばならない。しかし、結局は座視、問題について考えてみなければならぬのではないかと思うことがある。それはホロコーストについてのことだ。

ユダヤ人六〇〇万人の虐殺について直接的に日本は関与もしていないし、責任もないという。しかし本当にそう言い切れるのだろうか。

ユダヤ人との距離

日独伊三国軍事同盟のもとドイツのナチスによるユダヤ人迫害さらには虐殺について日本も密接なドイツとの関係から知っていたにちがいない。しかし、結局は座視、問題について考えてみなければならぬのではないかと痛感する。ユダヤ人六〇〇万人の虐殺について直接的に日本は関与もしていないし、責任もないという。しかし本当にそう言い切れるのだろうか。特にキリスト者にとってはイエス・キリストはユダヤ人だったこと無視したのではなかったか。この点、日本にとってホロコーストに対する痛みは強くあるべきはずだ。しかも、この距離を縮めていくことも戦後六〇年ということの一つの課題ではないかと痛感する。(教団総会議長 山北宣久)